静岡新聞で学ぼう

静岡新聞

Newspaper in Education

① 毎朝バス停で幸子さんは男性に何と声をかけましたか。

② 男性は幸子さんに対してどんな態度を取りましたか。

ダウン症少女へ返したかった「おはよっ！」…

バス停の男性 通夜に届けた悔恨と謝罪

袋井、心の実話 絵本に

絵本の完成を喜ぶ福田幸子さんの両親（右2人）と鈴木教子さん＝3月27日午後、袋井市内

「おはよっ！」。毎朝、元気にあいさつを投げ掛けるダウン症の少女と、冷たい態度を取り続けた初老の男性。かみ合うことがないかに見えたバス停での関わりは、実は男性の心に〝灯〟をともしていた―。そんな小さなドラマをつづった絵本を袋井市小山の社会福祉法人なごみかぜ（大場保治理事長）が出版した。少女の死を知った男性は両親を訪ね、自身の行いを悔い、わびたという実話。「娘が人の心を変えた。絵本は彼女が生きた証し」。両親は悲しみを乗り越え、前向きに歩み出そうとしている。

モデルになった福田幸子さん

モデルとなった少女は2011年8月に肺炎のため急逝した県立袋井特別支援学校の福田幸子さん＝当時(12)、中学部1年＝。

葬儀場で営まれた福田さんの通夜で、母親の洋子さん(56)は見知らぬ男性から「私は毎朝バス停でさっちゃんに会っていた者です」と話し掛けられた。

洋子さんは幸子さんが亡くなる半年ほど前から「（学校近くの）バス停で、『おはよう』と声を掛けても返事をくれないおじさんがいるの」と聞かされていた。

「だから（男性のことが）すぐに分かりました」。男性は新聞の訃報欄で幸子さんの名前を見掛け、「もしかしたら」と駆け付けた。

男性は来る日も来る日もけなげにあいさつしてくる幸子さんに、「障害者は嫌いだ」と心ない言葉をぶつけたこともあったと打ち明けた。「本当は心温められていた」「ありがとうを言いたくて来た」。短くそう告げ、名乗らずに立ち去ったという。

父親の博光さん(57)は「障害者は人として障害があるわけではありません。絵本からごく当たり前のメッセージを受け止めてもらえれば」と話す。

挿絵は同市内の鈴木教子さん(45)が担当した。鈴木さんも20年前の交通事故で障害を抱え、「自分と重ね合わせながら描いた」と言葉に力を込めた。

２０１３年４月２日朝刊　一社

③ 男性はなぜ幸子さんの通夜に来たのでしょうか。気持ちを考えましょう。

年　　組　　名前

（小学校中学年以上　道徳総合）